

鴉片

芥川龍之介

青空文庫

クロオド・フアレエルの作品を始めて日本に紹介したのは多分堀口大学氏であらう。僕はもう六七年前に「三田文学」の為に同氏の訳した「キツネ」艦の話覚えてゐる。

「キツネ」艦の話は勿論、フアレエルの作品に染みてゐるものは東洋の鴉片アヘンの煙である。僕はこの頃矢野目源一氏の訳した、やはりフアレエルの「静寂の外に」を読み、もう一度この煙に触れることになった。尤もこの「静寂の外に」は芳しい鴉片かんばの匂の外にも死人の匂をも漂はせてゐる。「ポオとボオドレエル」兄弟商会の造つた死人の匂をも漂はせてゐる。

「おや、聞えたぞ。いや、空耳だらう。己にはわからない。死人の土地から洩れて来るにしてはあんまり音が大き過ぎる。一体ここで物の割れる音なんかするわけがない。泥溜どろだめの中で棺桶くさめが噓くさめをする。——一枚の板が揺ぶられる。頑丈な釘がうちつけてあるのを恐しい音をさせて軋きしませる。……」

これはポオの「Premature Burial」が大西洋の彼岸に伝へた幾多の反響の一つである。が、そんなことはどうでも好い。僕にちよつと面白かつたのは下に引用する一節である。——「ところで己すでに仏蘭西フランスの土地で阿片を造らうとして失敗をつづけ乍ながらさまざまに苦心した。

東京から持つて来た罌粟けしの種子を死骸で肥えた墓地に植ゑて見ると思ひの外に成績がよくてその特徴を発揮させることが出来た。今では、その毒汁で脹らんだ芥子けしぼうず坊主を切りさへすれば、望み通りに茶色の涙のやうなものがぼろぼろと滴り落ちて来る。……」

鴉片に死人を想はせるのはフアレルの作品に始まつたのではない。僕はこの頃漫然と兪樾ゆゑつの「右台仙館筆記うたいせんくわんひつぎ」を読んであるうちにかう云ふ俗伝は支那人の中にもあつたと云ふことを発見した。それは同書の中に掲げた「賈慎庵かしんあん」の話に出合つたからである。

賈慎庵は何でも乾隆けんりゆうの末の老諸生の一人だつたと云ふことである。それが或夜の夢の中に大きい役所らしい家の前へ行つた。家は重門ことごと尽く掩おほひ、闐げきとしてどこにも人かげは見えない。「正に徘徊はいくわいの間、俄にはかに数人あり、一婦を擁して遠きより来り、この門の外に至る。」それから彼等はどう云ふ量見か、婦人の上下衣を奪つてしまつた。婦人はまだ年少である。のみならず姿色もない訣ではない。「瑩然えいぜんとして裸立す、羞愧しうきの状、殆ど堪ふ可からず。」氣を負うた賈かは直ちに進んで彼等の無状を叱りつけた。

「汝輩なんちがはい、何びとぞ。敢て無礼を肆しする？」

しかし彼等は微笑したまま、かう云ふ返答をしただけである。

「此れ何ぞ異とするに足らん。」

「言、未だ畢をはらず。門忽ち啓く。数人有り。一巨桶いちきよとうを扛かうして出づ。一吏文書を執つてその後に従つて去る。衆即ち裸婦を擁して入る。賈またも亦随つて入る。」それから数門を過ぎて一広庭に至ると、「男女数百を見る。或は立ち、或は坐し、或は臥す。而して皆裸にして寸縷すんる無し。堂上に一官坐す。其前に一大搾さくしやう牀しやうを設く。健夫数輩、大鉄叉を執り、任意に男婦を將もつて槽内に又置さちし、大石を用つて之を压榨す。膏かう血淋けつりん漓りたり。下に承くるに盆を以てす。盆満つれば即ち巨桶中に挹いふちう注ちうす。是の如きもの十余次。巨桶すなはち乃満つ。数人之を扛して出づ。官文書を判して一吏に付し、与ともに同じく出づ。」そこで賈が吏の顔を見ると、これはとうに墓の下へはひつた昔の隣人の周達夫しうたつふである。賈は進んで周の名を呼んだ。

「子胡しなんぞ此に在るか？ 此れ豈あに久しく留る可べけんや。速すみやかに我に従つて出でよ。」

周は驚いてかう言つた。が、賈は更に桶とうちう中の物の何であるかを尋ねて見た。

「鴉片煙えんかう膏かうなり。」

鴉片はまだ乾隆の末には今日のやうに流行しなかつた。従つて賈も亦鴉片とは何ものであるかを知らなかつた。

「鴉片煙とは何物ぞ？」

「方今承平日に久しく、人口過剰に苦しんでゐる。宜しく大劫だいこふの銷除せうちよする有るべし。元来大劫なるものは水火刀兵の災に過ぐるものはない。この劫こふに遇ふものは賢愚とも俱に滅びてしまふ。福善禍淫の説も往往此に至つて窮まるものである。そこで天帝は諸神の會議を召集し、特に鴉片煙劫はじを創めることにした。鴉片煙劫とは世間の罌粟の花汁くわじふを借り、熬鍊うれんして膏かうと成し、人の吸食に任ずるものである。この煙を食ふものは劫中に在り、この煙を食はざるものは劫中に在らず。その人の自ら取るに任かせて造物の不仁を咎めさせないのである。この劫有りて以て人口過剰の数を銷除せうちよすれば、則ち水火刀兵の諸劫は十の五六を減ずるであらう。けれどもこの罌粟と云ふものは草花に属するものであり、古来世間には多いものである。その又汁も淡薄であるから、熬かうして膏とすることは出来ない。故に九幽の主に命じ、無間地獄中に不忠不孝無礼義破廉恥諸罪の魂を選び取つてこの間に録送し、膏血を搾取して地上山陵原隰墳衍の神に転付し、この膏血をして罌粟の花根内に灌ぎ入らしめ、根よりして上は花苞に達せしむれば、則ちその汁も自然に濃郁にして、一たび熬鍊を経れば、光色黝然たらん。子試みに之を識れ。数十年の後、この煙天下に遍からん。」

賈は更に尋ねようとした。「忽ち又人有り。数十の男婦を駆りて至る。鞭策べんさく甚だ苦。

声を齊^{ひとし}うして呼号す。「賈^{おどろ}は悸いて目を醒ました。それからこの夢を人に語つた。けれども誰一人信ずるものはない。そのうちに道光の中葉頃に至り、鴉片煙は果して流行し出した。尤も賈はそれよりも前に故人の数にはひつてゐる。しかし賈の夢の話は未だに人の耳に残つてゐる。そこでその頃誰からともなしに「鴉片煙中死人の膏血有り」などと口々に言ひ囃^{はや}すやうになつた。……

墓地に植ゑた罌粟の花から絶好の鴉片が得られると云ふのはフアレエルの想像の生んだものであらうか？ それとも又上に掲げた支那の俗伝の生んだものであらうか？ 僕は勿論どちらとも断言する資格を持つてゐない。唯この俗伝を生じたのも或は虞美人^{ぐびじん}の血の化して虞美人草となつた話に根ざしてゐるかと思ふだけである。

なほ最後につけ加へたいのは鴉片の煙は煙草のそれよりも、——殊に紙巻や葉巻のそれよりも東洋的香氣の強いことである。若し^も鴉片の煙の匂に近い匂を求めるとすれば、それは人氣のない墓地の隅に寺男か何かの掃き集めた^{しきみ}櫛の葉を焚いてゐる匂であらう。従つて鴉片の煙の匂は清朝の支那人は暫く問はず、僕等現代の日本人にも墓、——死人、——死などと云ふ聯想を伴ひ易いものである。が、それ等の聯想は必しもあの「悪の華」の色彩を帯びてゐるとは限つてゐない。僕はこの文章を草しながら、寧ろいつか読んだことのあ

る^{せい}青^{せい}々^{せい}の発句を思ひ出してゐる。――
初冬や谷中^{やなか}あたりの墓の菊

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集 第十三巻」岩波書店

1996（平成8）年11月8日発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：林 幸雄

2002年1月26日公開

2004年3月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鴉片

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>